

I クビアカツヤカミキリに関する基礎情報

1. クビアカツヤカミキリの特徴と生態

(1) 特徴

【分類】コウチュウ目カミキリムシ科ジャコウカミキリ属

【種名】クビアカツヤカミキリ

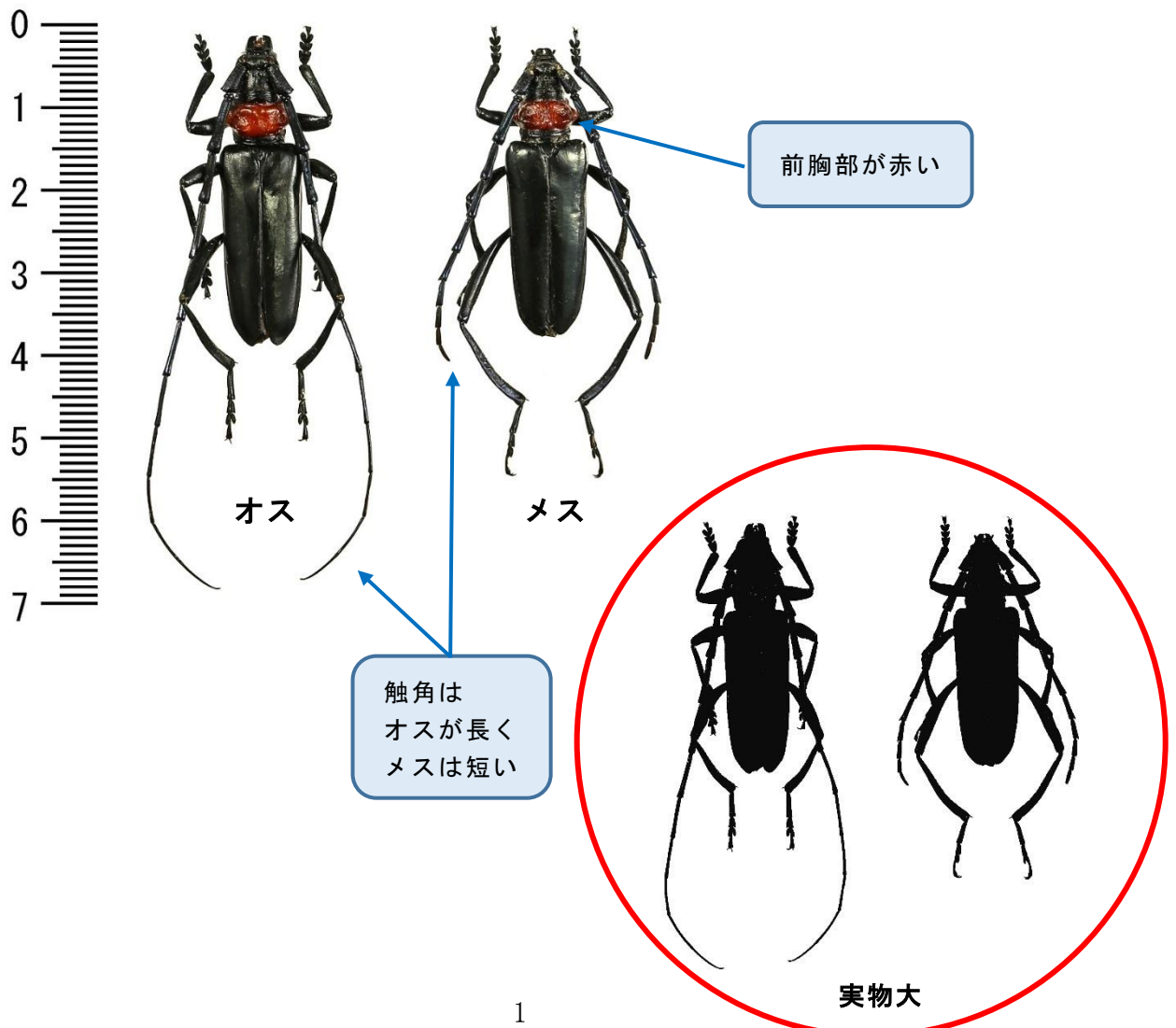
【学名】*Aromia bungii* (Faldermann, 1835)

【原産】中国、朝鮮半島、ベトナムなど

【体長】25mm～40mm 程度

【特徴】・全体は青みを帯びた黒色で、つやつやとした光沢がある

- ・前胸部（クビのように見える部分）の背中側が赤く両側に突起があり、そろばんの珠のような形をしている
- ・オスの触角の長さは体長の2倍程度で長い。メスの触角は体長と同程度
- ・強い匂いを放つ



(2) 生活史

本種の日本での生態はまだよく分かっていませんが、幼虫の期間は2年間程度と考えられています。成虫は概ね6月～8月頃に出現します。幼虫の活動期間の4月～10月頃が、クビアカツヤカミキリの確認しやすい時期となります。下記のクビアカツヤカミキリの生活サイクルを参考にして下さい。

クビアカツヤカミキリの生活サイクル

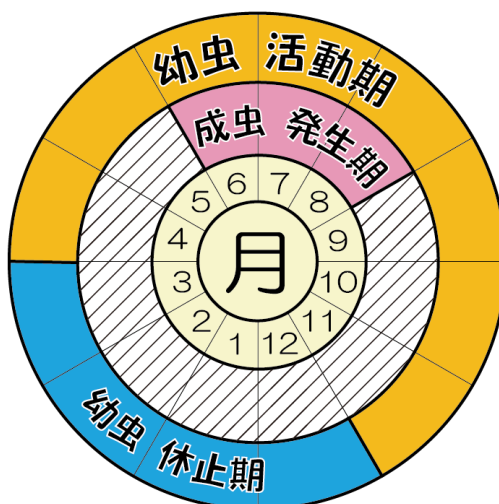
月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	成虫・産卵												
	幼虫1年目												
	幼虫2年目 (前蛹)												
	蛹・羽化												

注1: 前蛹とは、幼虫が蛹になるための準備期間で、餌を食べなくなってから蛹になるまでの間を指します

注2: 日本での幼虫や蛹の期間はよくわかっていません

凡例

- : 幼虫の活動期間
- : 幼虫の活動休止期間



年間における成虫・幼虫の活動期

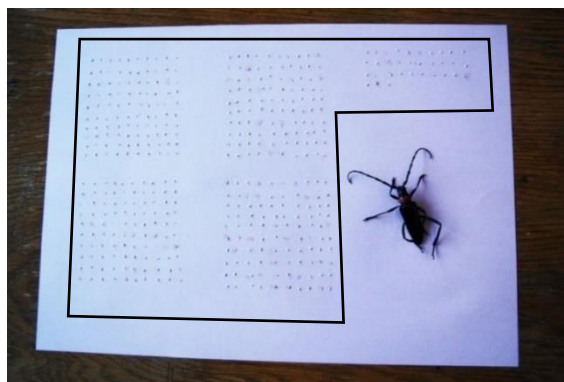
① 卵

本種のメスは 6 月～8 月頃、サクラ、ウメ、モモ、ハナモモ等の樹木の樹皮の割れ目などに産卵します。樹皮がまわっている古木などが産卵に好まれる傾向があり、樹皮が平滑な若木への産卵は少ないようです。メスの生涯産卵数は飼育条件下で平均 300 個前後、最大 1,056 個という報告があります。卵は、10 日前後で孵化し、幼虫になります。



卵（目盛りは 1mm）

提供：農林水産省横浜植物防疫所



メスの腹部にあった卵（枠内）

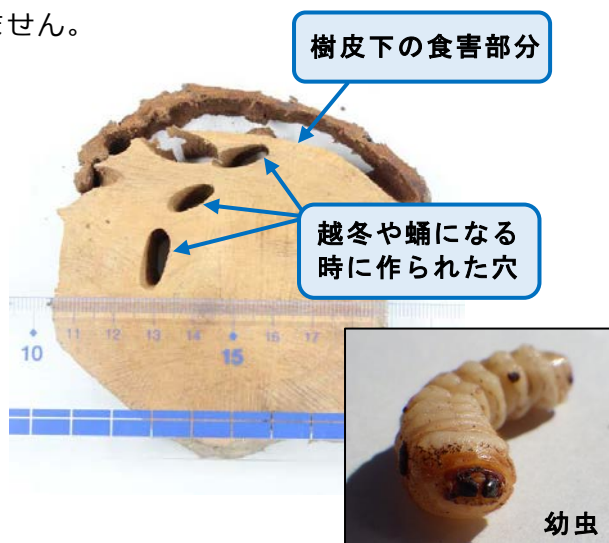
提供：国立研究開発法人 森林研究・整備機構

② 幼虫

孵化した幼虫は、すぐに樹皮に穴を開けて樹木内部に侵入し、主に樹皮直下の材を食害していきます。その部位は樹木が成長する部分（形成層）や、水分・養分の通り道（道管・師管）などであり、樹木は大きなダメージを受け、被害が大きい場合には枯死します。

幼虫の活動期（食害する時期）は 4 月頃から 10 月頃までで、活動期間中の幼虫は、「フラス」と呼ばれる食べた木屑と糞の混合物を、幹や枝に開けた孔（排糞孔）から盛んに排出します。本種のフラスは薄い切片状の木屑を多く含み、棒状やかりんとう状につながるが多いのが特徴で、幼虫の成長とともに太く、量も多くなります（p.18 参照）。終齢幼虫（蛹になる前の幼虫）で大きさは太さ約 1cm、長さ約 4cm になります。

冬季（11 月頃～3 月頃）は幼虫の活動が休止するため、この期間にはフラスは見られません。



食害された枝の断面

提供：農林水産省横浜植物防疫所（幼虫写真を除く）

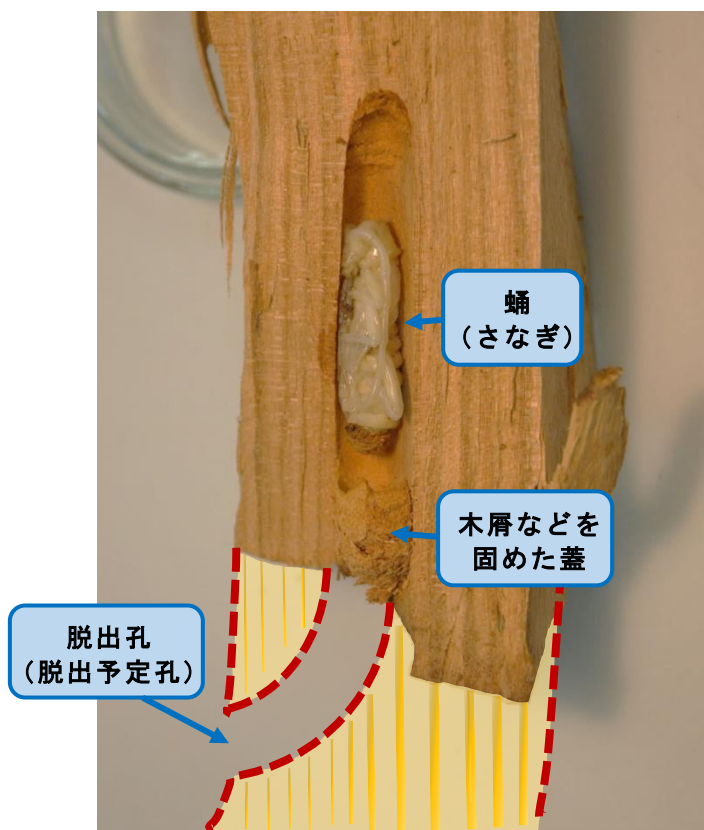


被害木の中の幼虫

提供：国立研究開発法人 森林研究・整備機構

③ 蛹（さなぎ）

終齢に成長した幼虫は、秋頃に樹木の中心部に入り込み、木屑を固めて蓋をした蛹室（ようしつ）をつくって休眠します。ただし、一部の幼虫では初夏（6月）に蛹室をつくる事が確認されています。この時あらかじめ、羽化（成虫になること）して樹木の外に出る時に使う孔（脱出予定孔）を、樹皮を薄く残し、外から見えないように工夫して開けます。翌年の概ね5月頃に蛹は羽化して成虫となり、6月上旬頃から脱出予定孔の樹皮を噛み切って外へ出てきます。成虫が出たあとの孔（脱出孔）は、縦2～3cmの楕円形です。脱出孔が見つかったということは、少なくとも数年前からその地域に本種が侵入していたことになります。脱出孔の古さや数によって、当該地域への侵入時期や周辺への拡散状況などを推察することができます。



蛹室の中の蛹

提供：国立研究開発法人 森林研究・整備機構



脱出予定孔
(樹皮を薄く残してある)



脱出孔
(縦2～3cm程度)

④ 成虫

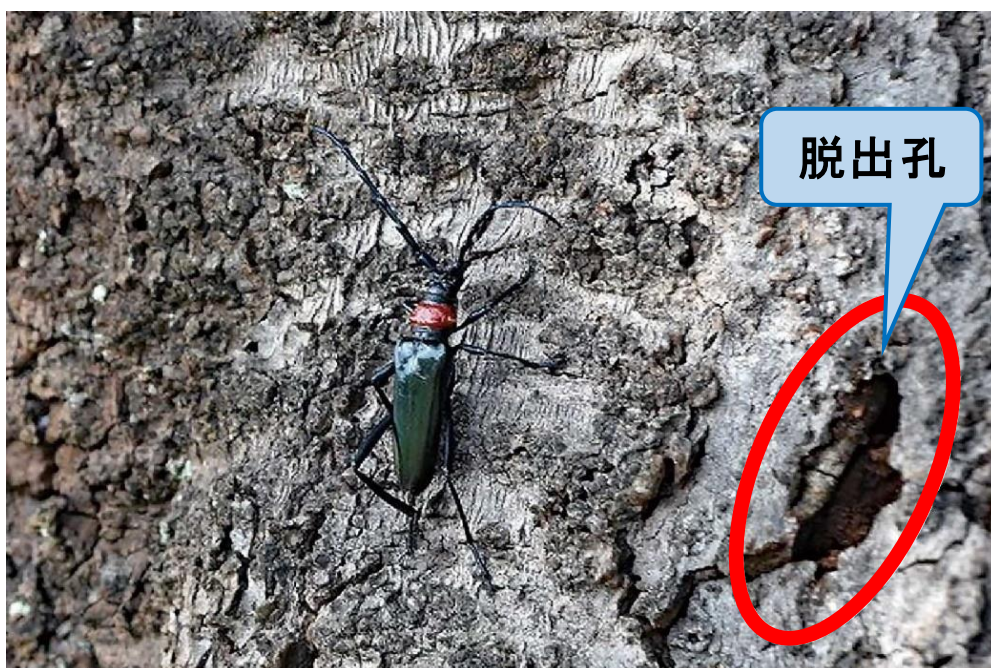
羽化して樹木の外に脱出した成虫は、その当日に交尾が可能で、脱出して 2～9 日後から産卵を開始します。基本的に昼行性で、成虫はクヌギなどの樹液に集まることなどが報告されていますが、幼虫のように樹木内部を食害することはありません。

メスが産卵するのは、羽化した樹木や近接する樹木が多いと考えられますが、時に 3 km もの距離を飛翔するとされ、また、車両に付着して運ばれた事例も報告されており、広い範囲に被害が拡大する危険があります。

成虫の発生時期は、都内の場合、主に 6 月上旬～8 月上旬頃で、ピークは 7 月上・中旬と考えられています。成虫はその年に交尾・産卵して一生が終わり、越冬することはありません。



交尾行動をとる成虫（上がオス・下がメス）



サクラの樹上を歩く成虫・メス（写真左）と脱出孔（写真右）

提供：豊口信行氏（上は 2020 年 7 月、下は 2020 年 8 月ともに福生市にて）

（３）法的な取扱い

クビアカツヤカミキリは、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律 平成 16 年 6 月 2 日法律第 78 号（以下、「外来生物法」という。）」により、2018 年 1 月に「特定外来生物」に指定されました。

特定外来生物とは、外来生物（海外起源の外来種）であって、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるものの中から指定されます。生きているものに限られますが、個体だけではなく、卵、種子、器官なども含まれます。

特定外来生物には、外来生物法により以下のような規制があります。

- ・ 飼育、栽培、保管及び運搬（外来生物法において「飼養等」という。）することが原則禁止
- ・ 輸入することが原則禁止
- ・ 野外へ放つ、植える及びまくことが原則禁止
- ・ 許可を受けて飼養等する者が、飼養等の許可を持っていない者に対して譲渡し、引渡しなどをすることが禁止（販売することも禁止）
- ・ 許可を受けて飼養等する場合、特定外来生物ごとにあらかじめ定められた「特定飼養等施設」以外での飼養等は不可

例えば **一般市民が、外来生物法の許可なく本種を捕まえて持ち帰ったり飼育したりすることは禁止** されているため注意が必要です。これらの規制に対する違反には罰則も設けられています。

ただし、以下の行為は問題ありません。

- 本種を捕まえてその場で殺すこと
- 死んだ個体を持ち運ぶこと
- 地方公共団体の職員がその職務の遂行に伴い、緊急に引取、処分するために一時的に保管又は運搬すること

* 別途、本種の防除に係る「処分のための運搬及び一時保管」の運用上の特例あり（p.36 参照）

（参考パンフレット・リーフレット）

環境省ホームページ

<http://www.env.go.jp/nature/intro/4document/poster.html>

2. 被害の特徴

本種の幼虫は、サクラ、ウメ、モモ、ハナモモ等の主にバラ科の樹木を食害します。被害が著しい場合には食害された樹木は衰弱し、枯れてしまいます。

本種による被害の影響は、おおむね次のように分類されます。

① 生態系への影響

本種は食樹とする樹種が比較的広く、そのため森林域に侵入定着した場合、在来カミキリムシ類との競合や、食害により樹木が枯損し、植生や森林生態系に影響が出るものが懸念されています。

② 農業への影響

本種の食害によるモモ、スモモ、アズキ、ウメなどの果樹への甚大な被害が、徳島県や栃木県、群馬県など複数の自治体で確認されています。

③ 人の生命や身体、文化・生活などへの影響

本種が好むサクラ類は天然記念物や特別天然記念物、重要文化財、史跡名勝等の文化財として指定されているものもあり、本種が、それらの所在する地域へ侵入した場合、文化財が枯損等により失われてしまう可能性があります。

また、多くの市民が利用する公園や通行する街路樹のサクラ並木などに被害が生じた場合、花見への影響など景観上の問題とともに、落枝や倒木により人の身体や財産等に被害を及ぼすおそれがあります。

本種の被害は若い樹木よりも古木、老木に多く発生する傾向があり（p.3 参照）、上記のような樹木への侵入が懸念されます。



食害を受けた果樹（左）とサクラ並木（右）

①出典：千葉大学園芸学部HP

②提供：農林水産省横浜植物防疫所